

リビング・ウィル

Living Will

2015年10月 発行 No.159

インタビュー

牛尾治朗

ウシオ電機会長

尊厳とともに生き
尊厳とともに死ぬ

残り少ない人生。最後は

「これだけはやりたかった」
ことを選んでやってみる。

認知症とリビング・ウィル

中学生が考える尊厳死

「出前講座」初の講師研修会



一般財団法人
日本尊厳死協会

高齢者問題 関心は世代を超えて

中学生が考える「尊厳ある死」

「本人のリビング・ウイルが明確でない場合は、どうなりますか」

「尊厳死に反対の人もいますが、協会の考えは」

私立海城中学校(東京都新宿区)の3年生、高岡龍之輔君(15)が、東京・本郷にある協会関東甲信越支部を訪れて支部理事に質問した。

ペットの死から

同中の3年間の社会科授業の総仕上げになる「卒業論文」のテーマに「尊厳のある死に方」を選び、取材にきたのだった。

高岡君が尊厳死を選んだ理由は、飼った猫の死を体験したからだ。「幸せ」を意味するイタリア語「フェリーチェ」と名付けた猫は、物心ついた時から一緒にいた。

「ショックでした。初めて『死』の存在を実感しました。それが人

の死だとしたら、理想的な死とは何だろうかと考えたのです」

「尊厳死」という言葉は、小学4年の公民の授業で、自己決定権の具体例として学んでいた。

尊厳死のことをもっと知ろうと、6月20日の第4回リビングウイル研究会にも参加し、関心を持つ人の多さに驚いた。

「患者や家族へのケアが十分にできていることがわかりました。意外だったのは、終末期でも充実した日々が送れると知ったことです」

法案作りに挑戦

高岡君は2学期末の論文提出までに、尊厳死の法制化に反対する団体などの取材も予定している。

「尊厳死の是非についてよく考えて、自分の意見を持ちたいです」

高岡君は、医師を目指したいという夢を持っている。

今年の卒論で、自分なりの尊厳死法案を起草しようと頑張っている生徒もいる。

指導に当たる社会科主任の横井成行教諭によると、その生徒は神経難病ALS(筋萎縮性側索硬化症)の方にも会い、考えを深めている。

「議員連盟の法律案より柔らかい案になるのでは、と期待しています」(横井教諭)

同中で論文作成の授業が始まって20年余り。これまでに約20人が尊厳死をテーマに選んでいる。同

支部では、海城中の生徒の来訪が恒例行事となっている。

祖父母の死去やペットの死が原体験になっている場合や、医師志望で「生と死」に関心をもつ生徒がいることなどが、尊厳死がテーマに選ばれる理由ではないか、と横井教諭はいう。

卒論を集めて製本した『社会科卒業論文集』を見ると、最近は「介護」「孤独死」「買い物難民」といったテーマが目立つ。高齢化社会と密接な関係のある「空き家問題」も人気だ。

授業で出前講座

同支部には、東京都立日比谷高校の生徒や看護系大学の学生たちも訪れる。

私立女子校の田園調布学園中部・高等部(東京都世田谷区)では、同支部に出前講座を依頼し、授業の一環として生徒たちに尊厳死を学ばせている。年々、受講を希望する生徒が増えている。



第4回リビングウイル研究会を取材する高岡君。左は母の博子さん